富士山のテクノスケープ:
自然資源は崇高なる紙パルプ産業景観をいかに形成したか

著者:

岡田 昌彰

所属：

近畿大学（日本・大阪）

はじめに

(1) 研究の背景と研究の目的

富士山は古代以来，日本を代表する山として君臨してきた。その壮麗な姿は『万葉集』[1]や『竹取物語』[2]といった奈良・平安時代の文学や紀行文をはじめ，中世（鎌倉時代）以降の和歌や俳句においてもしばしば描写されてきた。絵画界では，19 世紀の葛飾北斎による「富嶽三十六景」が広く知られており，現在も世界各地に愛好者をもつ代表的な美術作品として国際的に親しまれている。

一方で，富士山は古代以来霊山として崇敬され，多くの日本人の信仰の対象とされてきた[3]。噴火を繰り返してきた活火山であり大災害を象徴する存在でもある富士山は，畏怖の念をもって捉えられてきた。その一方で，山全体が「神」と見なされ，古来の山岳仏教である修験道[4]とも深く結びついていった。その存在は，まさに「両義的（アンビバレント）」であると言えよう。この信仰は中世以降に広まり，近世には「富士講」[5]の成立を通じて庶民の間にも普及した。富士講の人々は，富士山を御神体とする富士浅間神社の分祀を各地に建立するとともに，遠方から富士山を遥拝するための遥拝所[6]を設けた。さらに，富士山が望める地域では，山にかかる雲の様子によって天候を占うなど，日常生活とも深く結びついてきた[7]。2013 年には，富士山そのものをはじめ，周辺の神社，富士五湖，忍野八海，三保松原など 25 の構成資産が「富士山―信仰の対象と芸術の源泉―」としてユネスコ世界文化遺産に登録されている。

しかし近代に入ると，富士山周辺，とりわけ山の南約 25km に位置する静岡県富士市一帯は，国内有数の紙パルプ産業都市として発展した。その基盤には江戸時代にまで遡る和紙生産の伝統があり，1880 年頃からは良質な湧水と豊富な河川水力を活用して機械製紙が始められた。現在では，この地域に数多くの紙パルプ工場が集積し，雄大な富士山を背景として大規模な産業景観（テクノスケープ）を形成している（図 1）。

本研究は，地域の自然資源を基盤として発展してきた富士山周辺地域における紙パルプ産業の発展の歴史を明らかにし，あわせてこれらの施設によって形成されてきたテクノスケープの実態と，その評価の変遷を明確化することを目的とする。本研究では特に，富士山という既存の景観と並置されるかたちでいかにしてテクノスケープが生成されてきたのかに注目

する。さらに，現代の写真コンテストや観光資源としての活用事例を検討することで，富士山の呈するテクノスケープの「新たな地域アイデンティティ」としての可能性を検討する。

図1　富士山を背景とする産業景観（静岡県富士市）（筆者撮影）

(2) 研究の方法

本研究では，富士市における紙パルプ産業の発展史を，産業の基盤となった地域の自然資源との関係に着目しつつ整理する。特に重要な立地要因であった湧水の存在に注目し，現地調査を通じてそれぞれの湧水空間が有する地域的意義を明らかにする。これらの湧水はいずれも富士山の雪解け水を水源としており，富士山の神格化と並行して湧水もまたアニミズム的性格を帯び，信仰の対象として位置づけられてきた点に着目する。

加えて，富士山に由来する自然資源を活用して形成されてきた紙パルプ産業のテクノスケープが，結果として富士山の美しい景観と並置されてきた点に着目する。人工と自然，あるいは古代と近代の交錯する景観として捉えうるこの「複合的景観」に対する社会的な解釈の変遷を明らかにする。具体的には，行政による景観施策に加え，官民双方によって実施されてきた写真展や観光イベントに注目する。これらの取り組みに関する詳細な情報を収集・分析することで，テクノスケープが獲得した新たな地域アイデンティティとしての意義を明確化する。

(3) 既往研究

富士山の神格化や信仰，ならびにそれに関連する芸術表現については，これまでに数多くの研究がなされてきた。島田裕巳[8]や H. バイロン・エアハート[9]らは，これらの実態を詳細に明らかにしているが，富士山と近代産業との関係については論じていない。一方，日本における聖なる湧水の分類に関しては，岡田による全国に現存する 756 か所の湧水地を対象とした研究がある[10]。この研究で扱われている事例の中には本研究の対象地域に関連するものも含まれるが，湧水とともに霊山である富士山のアニミズム的信仰とを結びつけて論じるものではない。また，日本における火山と都市の関係や，石灰石採掘などの近代産業を扱った研究も存在する[11]。しかしながら，富士市を対象として，富士山，湧水，近代産業を横断的に捉えた研究はまだ存在していない。

富士山の湧水とアニミズム——聖なる湧水と浅間神社

玄武岩質の溶岩や火山砂礫からなる高い透水性をもつ富士山の山体下部には，「古富士泥流層」と呼ばれる難透水層が存在している。この地層構造によって，富士山は「天然のフィルターをもつダム」とも言うべき機能を有しており，山に降った雨や雪は上部の地層によって濾過されながら地下へと浸透する。その後，それらの水は難透水層によって遮られ，「帯水層（アクイファー）」を形成する。こうして蓄えられた地下水は山麓をゆっくりと流下し，地層の不連続部や溶岩流の末端部において湧水として地表に現れる[12]。富士市はこの溶岩流の末端部に位置しているため，富士山に由来する豊富な地下水が湧出する主要な地域となっている。

岡田による研究[13]においては，日本各地において湧水が聖なるものとみなされ，長年にわたり地域共同体の信仰の場として存在してきたことが明らかにされている。富士市における湧水も例外ではなく，各湧水の周囲には多様な形態の地域信仰空間が形成されていることが確認された（図 2）。本研究では，こうした地域信仰と結びついた湧水を富士市内で 9 か所確認した。具体的には，祈願のうえ湧水を浴びることで疣が治癒するとされる伝承をもつ瀧不動（不動明王像）が祀られた湧水，湧水の水神社周辺が花壇やベンチを備えた住民の憩いの広場として整備されているおやしきの湧水，そして弁才天像を有する永明寺の境内に湧出する湧水などが挙げられる[14]。

図２　富士市における聖なる湧水（筆者撮影）

(左) 滝不動　(右上) おやしきの湧水

(右下) 永明寺の湧水と弁財天

図３　富士山周辺に分布する湧水を伴う浅間神社　（筆者撮影）
（左上）富士山本宮浅間大社湧玉池（静岡県富士宮市）
（右上）北口本宮冨士浅間神社龍の口湧水（手水）（山梨県富士吉田市）
（左下）小室浅間神社御神水（手水）（山梨県富士吉田市）
（右下）小沼浅間神社の湧水（手水）（山梨県西桂町）

さらに，日本全国には「富士浅間神社」と称される神社が 1,300 社以上存在するとされている [15]。本研究の調査により，富士山周辺に立地するそれらの浅間神社のうち，少なくとも 7 社において，富士山の雪解け水に由来する湧水が手水舎の聖水や御神水として用いられていることが確認された。

静岡県富士宮市に鎮座する富士山本宮浅間大社の湧水は「湧玉池」を形成している。この池の北西端には，湧水を司る神を祀る水屋神社が建立されている。この聖なる水は，古くから富士山登拝者による禊に用いられてきた（図 3 左上）。また，紀元前 27 年，垂仁天皇が，富士山の雪解け水が湧き出るこの地を選び，火山の「火の神」を鎮めるために浅間神社の本殿を建立したと伝えられている [16]。

同様に，北口本宮冨士浅間神社および小沼浅間神社においても，手水舎の聖水として湧水が用いられているが，いずれも龍頭をかたどった吐水口を備えている点が特徴的である（図 3 右上・右下）。環境人類学者ヴェロニカ・ストラングが指摘するように，龍は世界各地において水を司る神的存在として長く認識されてきた [17]。日本においても寺社の手水舎に龍の意匠が用いられる例は少なくないが，上記の事例は霊山・富士山に由来する湧水そのものの神格化を象徴する事象として解釈することができる。

さらに注目すべきは，小室浅間神社において手水舎の龍頭吐水口が溶岩で造形されたミニチュアの富士山の上に据えられている点である（図 3 左下）[18]。富士山は活火山であり，そ

の山体全体は幾度にもわたる噴火の溶岩流によって形成されている。この神社の手水空間においては，湧水の神聖性と，神格化された富士山そのものの聖性とが，同時にかつ重層的に表現されていると言える。

富士市における紙パルプ産業の発展

富士市は，古くから製紙工業，とりわけ和紙生産が盛んな地域であった。その主な要因の一つとして，富士山に由来する豊富な湧水と，地域内を流れる多数の河川の存在が挙げられる。近代に発展した紙パルプ産業[19]では，パルプの製造や抄紙工程において，不純物が少なく水温が安定した大量の水が必要とされる。富士市の湧水および河川水は，年間を通じて水量が安定しており，これらの条件を満たす理想的な水資源であった。

このような地理的条件を背景として，1890 年には同市入山瀬地区において富士製紙株式会社（現・王子エフテックス株式会社；図４）が最初の工場を開設し，これに続いて多くの企業が相次いで紙パルプ工場を建設した。1949 年には市内の製紙工場群と港湾とを結ぶ貨物鉄道として岳南鉄道が開業し，さらに 1964 年には近代的な大規模港湾である田子の浦港が開港した。これにより，鉄道と港湾とを一体化した効率的な物流体系が確立され，富士市は日本有数の紙パルプ産業都市として発展するに至った。

一方で，豊富な河川流量は製紙工場の動力源としても利用されていた。その後，紙パルプ関連企業に加え金属生産企業なども参入し，地域内に一連の水力発電所が建設され，動力の電化が進められていく。戦前に建設された多くの水力発電所は現在もなお富士山周辺地域において稼働を続けている。その中には，四日市製紙株式会社による大久保発電所のように，製紙企業によって建設されたものも少なくない。これらの施設の一部は後に電力会社へと移管されたが，現在においても紙パルプ工場群と並んで，地域に固有のテクノスケープを形成している（図 4）。

図４　富士市・富士宮市における紙パルプ産業景観（筆者撮影）

（左）旧・富士製紙株式会社（現・王子エフテックス株式会社）第一製造所（1890 年）

（右）旧・四日市製紙株式会社大久保発電所・長貫堰堤（1911 年）

富士市のテクノスケープをめぐる解釈の変遷——忌避から再評価へ

富士市においては，古来より人々に霊感や親しみを与えてきた雄大な富士山と，近代以降に新たに出現した煙突や工場群からなる産業景観とが併存することにより，複雑な議論が生じてきた。特に，紙パルプ産業が近代以降の富士市の経済を牽引してきた事実を踏まえると，テクノスケープを単なる景観阻害要因として全面的に否定することは必ずしも容易ではない。この産業は，人々に繁栄と雇用の機会をもたらすとともに，鉄道・道路・港湾といった社会

基盤整備にも大きく寄与してきた。それでは，富士山を背景とする富士市のテクノスケープは，これまでどのように受け止められてきたのであろうか。本章では，行政による景観施策や，企業・民間団体によって開催されてきた各種イベントに着目し，この景観が地域アイデンティティの象徴，さらには一つの文化的景観として解釈されるに至る過程を明らかにする。

(1) 1990 年代までの否定的解釈——「煙突ゼロ作戦」にみる改善対象としてのテクノスケープ

近年に至るまで，当地におけるテクノスケープに対する認識は総じて否定的であったことがわかる。とりわけ景観への社会的関心が高まった 1990 年代には，既存の景観を著しく損なうものとみなされた製紙工場の煙突に対し，その表面に図柄を描くなどの対策が行政主導で講じられた。さらに，テクノスケープそのものの除去や緩和を目指す取り組みも継続して行われ，2002 年から 2007 年にかけては，県および市の補助金を活用し，不要と判断された煙突を積極的に撤去する「煙突ゼロ作戦」が実施された。

一方で，これとは対照的な動きも見られる。1994 年頃から，富士市は「逆転の発想」による「煙突を生かしたまちづくり」の可能性を模索し始めた。市は，煙突を鮮やかな色彩で塗装する取り組みを進めるとともに，工場を博物館として公開するなど，「ファクトリー・パーク・シティ」としての新たな都市イメージの構築を試みた。ある意味では，これは煙突景観を全面的に消去するという目標を断念し，産業景観との共存を選択する一種の妥協案であったとも捉えることができる。

(2)「富士山百景写真コンテスト」にみるテクノスケープ

これに対し，2002 年頃を境に，テクノスケープをより肯定的に捉える視座が顕在化し始めたことがわかった。富士市は「富士山百景」と題する公募写真コンテストを開催しており（葛飾北斎の《冨嶽三十六景》に着想を得たものと考えられる），その入選作品の一つとして「工場からの煤煙にかすむ富士山」が選ばれている。その後 2006 年以降は，富士商工会議所の主催により「富士山百景写真コンテスト」が毎年開催されており，そこではテクノスケープを含む作品が頻繁に入選していることが確認できた。

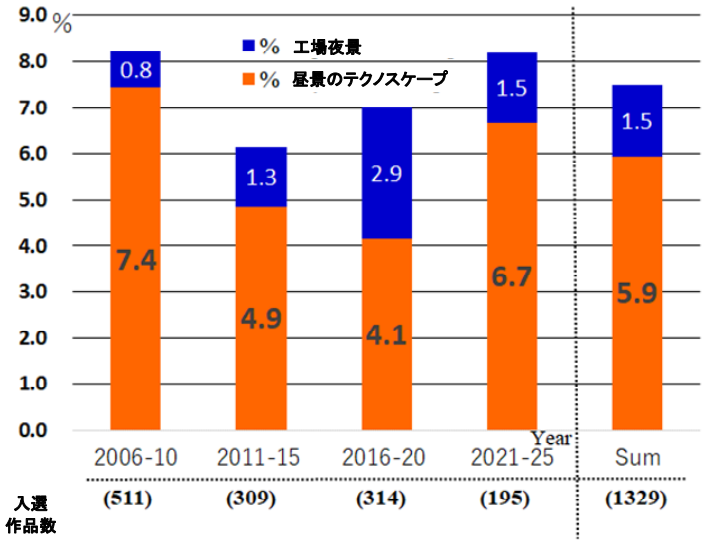

図5　テクノスケープ作品の入選割合の推移（左）と「富士山百景写真コンテスト」におけるテクノスケープ入選作品の例（右） *https://www.fujisan-kkb.jp/gallery/*

入選作品のうちテクノスケープを主題とする作品の割合を 5 年ごとに算出したところ，年間を通じておおむね 6～8%の割合で一貫して出現していることが明らかとなった。内訳を

見ると，工場夜景は 1～3%，昼景のテクノスケープは 4～7%を占めている（図 5 左）。さらに詳細に検討すると，2013 年頃以降，工場夜景の比率が増加していることが確認できる。この傾向は，後述する民間団体「富士工場夜景倶楽部」によるプロモーション活動の影響を受けた可能性が高いと考えられる。

(3) 産業観光と工場夜景ツアー

2011 年には，静岡県庁と民間団体日本観光協会の主催により「産業観光ワークショップ in しずおか」が開催された。この催しでは，工場見学に加えて，前述の岳南鉄道を利用し沿線の工業地帯の夜景を鑑賞する特別イベントも実施された。これを契機として，鉄道沿線に展開する工場夜景への関心が喚起されたと言える。

2013 年には，工場夜景をテーマとした写真展が開催され，さらに翌 2014 年には工場夜景観光を推進するため富士市役所内に「富士山・シティプロモーション推進室」が新設された。これを契機として，2014 年には富士商工会議所による工場夜景ツアーが開始され，2016 年には富士市によって工場夜景の PR を目的としたラッピングトラックが運行されるなど，さまざまな観光施策が展開された。さらに 2015 年には，富士商工会議所が「富士工場夜景 MAP」を制作・公開している。これらのツアーにおいては，岳南鉄道が工場夜景を鑑賞するための理想的な視点場として，現在に至るまで継続的に活用されている（図 6）。

2012 年には，地元の写真愛好家によって「富士工場夜景倶楽部」なる団体が結成され，以降，SNS などを通じて質の高い作品を継続的に発信してきた。同倶楽部の活動は，富士市における工場夜景の美的価値をいち早く見出しそれを一般社会へと広める原動力となった点において高く評価されるべきものである。実際，同倶楽部のメンバーは，前述の「工場夜景 MAP」の制作や，工場夜景ツアーの企画にも関与しており，この分野における先導役であったと言える。

図６　岳南鉄道を利用した工場夜景ツアー（筆者撮影）

(4) 紙パルプ企業による地域イベント

2009 年以降，地元の製紙企業であるコアレックス信栄株式会社は，「ふれあい紙まつり」を開催してきた。このイベントは，企業と地域住民との結びつきを深めると同時に，環境問題やリサイクルに対する意識の向上を目的としており，毎年大きな成功を収めている。会場では，トイレットペーパーを積み上げて「富士山」を構築する競技をはじめ，子ども向けの各種アトラクションや，トイレットペーパーの特別販売などが行われている。紙は日常

生活において極めて身近な製品であるが，こうしたイベントを通じて紙パルプ産業そのものが地域住民にとってより親しみやすい存在となっていると言える（図 7 左）。

さらに 2024 年，富士商工会議所は「えんとつサンタの街 Fuji クリスマスフェス」なる興味深いイベントを開催している。この催しは，航空法により義務づけられている高煙突の障害標識である紅白の縞模様を，サンタクロースの配色に見立てる創造的発想に基づくものである。会場では，クリスマスマーケット，キッズパーク，イラストアート展示など，さまざまな企画が展開されている（図 7 右）。煙突という存在そのものを祝祭的に取り上げるこのフェスティバルは，テクノスケープと地域住民との間，ならびに企業と地域社会との間に育まれてきた相互関係を端的に示す事例であると言え，これらの愛着をさらに深化させる役割を果たしていると考えられる。

図 7　紙パルプ産業に関連する地域イベント

（左）ふれあい紙まつり (2009-)　（筆者撮影）

(右) えんとつサンタの街 Fuji クリスマスフェス (2024) https://entotsu-santa.jimdosite.com/

結語

本研究によって，以下の 4 点が明らかとなった。

1）富士山の豊富な水資源を基盤とした紙パルプ産業の発展史

富士市における紙パルプ産業は，富士山に由来する安定した湧水・河川水という豊富な水資源を原動力として，近代以降大きく発展してきた点。

2）1990 年代までのテクノスケープに対する否定的評価と，2000 年代以降の市民活動・メディアを通じた再評価

テクノスケープは長らく景観阻害要因として否定的に捉えられてきたが，2000 年代以降，市民活動や写真メディアなどを媒介として，その価値が徐々に再解釈・再評価されてきた点。

3）写真コンテスト，工場夜景ツアー，地域イベントを通じたテクノスケープの文化遺産化と観光資源化

テクノスケープは，写真コンテストや夜景観光，地域イベントといった様々な実践を通じて，文化的価値を有する景観として再認識され，観光資源としても積極的に活用されている点。

4）自然と産業，信仰と文化が融合した景観としてのテクノスケープと地域アイデンティティ

富士市のテクノスケープは，自然と産業，信仰と文化が重層的に交錯する「複合的景観」として成立しており，新たな地域アイデンティティの基盤として形成されつつある点。

図8　コンテクスト置換を通じて創出される富士山の新たな景観価値

（左）葛飾北斎，冨嶽三十六景観（c. 1830）

（R）テクノスケープを前景とする現代の富士山景観　（筆者撮影）

なお，本研究で指摘した「テクノスケープを前景とする富士山の優美な景観」に価値をおく景観の見方は，現代になってから生成された景観の”斬新な見方”に一見見えるが，これは葛飾北斎が 200 年前に提唱した美学，すなわち「コンテクストの置換による新たな創造風景」と呼べるものであると考えられる。1830 年前後に発表された「冨嶽三十六景」において，例えば沖の高波や桶職人の作りかけの桶枠，あるいは農村に佇む水車などの”前景”の変化（置換）によって富士山の新たな景観的価値が動的に生成されている点は，景観学者中村良夫[20]が既に指摘している。前近代における「富士山の前景」のバラエティを葛飾北斎は多数収集し，36 にも及ぶ富士山の景観を的確に表現しているが，現代においてはまさしくテクノスケープがこの前景という役割を十分に担いうるものと考えることができるだろう。少なくとも，富士市の人々はその可能性にいち早く気づき，それを作品化し，あるいは地域アイデンティティの１つとして確立しつつあるのだ。その意味でも，テクノスケープ越しに

成立した富士山の風景は，まさに現代版の「冨嶽三十六景」と呼べるものであり，葛飾北斎の美学を現代に踏襲する秀逸な風景であると考えられる。

謝辞

本研究は，2024 年度 水・地域イノベーション財団による助成を受けて実施された。

補注・参考文献　（ウェブサイトは全て 2025 年 12 月 19 日現在）

1. 日本最古の現存する和歌集。「田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にぞ　富士の高嶺に雪は降りける」（万葉集）
2. 光り輝く竹の中から見つかる少女・かぐや姫を題材とした日本の説話。かぐや姫が去った後，不老不死の薬を嘆き悲しむ天皇が勅使に命じて富士山で焼かせたとされる。
3. Government of Japan, “Mount Fuji, Object of Faith” accessed December 19th, 2025, https://www.gov-online.go.jp/eng/publicity/book/hlj/html/201908/201908_08_en.html
4. 民間信仰・仏教・神道が習合した日本の宗教形態で，主に山岳修行者によって実践された。
5. 富士山を信仰対象とした民間宗教集団。
6. 島田裕巳『日本人はなぜ富士山を求めるのか』徳間書店, 2013 年，p. 23
7. 国土交通省ウェブサイト https://www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/bosai/fuji_info/chisiki/b05/
8. 島田裕巳『日本人はなぜ富士山を求めるのか』前掲書，31-70 頁。
9. H. バイロン・エアハート『富士山:信仰と表象の文化史』慶應義塾大学出版会，2019 年
10. Masaaki Okada, “*Sacred Springs and Magical Waters: Influences of Animism on the Sustainable Uses (Sake Brewing & Papermaking Industries) of Springwater in Japan”, Handbook of Traditional Spirituality and Sustainability* (Cham: Springer Nature, 2026) (forthcoming)
11. 岡田昌彰『日本の砿都:石灰石が生んだ産業景観』創元社，2017年；Masaaki Okada, Local Evaluation of Technoscape, Icon Vol. 10, pp. 80-93 (London: International Committee for the History of Technology (ICOHTEC), 2004)；岡田昌彰『テクノスケープ：同化と異化の景観論』鹿島出版会，2003年；岡田昌彰・山中智世「「芸術の梁山泊」高砂市における紙パルプ産業景観及び地域文化の形成に関する研究」，ランドスケープ研究88巻5号，日本造園学会，2024年
12. 土隆一「富士山の地下水・湧水」山梨県環境科学研究所，2007 年，pp. 375-387
13. Okada, *Sacred Springs and Magical Waters: Influences of Animism on the Sustainable Uses (Sake Brewing & Papermaking Industries) of Springwater in Japan*
14. 日本における水と知恵を司る女神，弁財天。
15. 富士山本宮浅間大社公式サイト http://www.fuji-hongu.or.jp/sengen/history/
16. 加藤亜紀『富士山の歴史―富士信仰のはじまりと富士登拝の伝承―』晋遊舎，2013 年，pp. 60-66
17. Veronica Strang, *Water Beings: From Nature Worship to the Environmental Crisis,* (London: Reaktion Books, 2023)
18. この溶岩は，富士山から直接採取されたものである可能性が極めて高い。
19. 日本における「近代」とは，一般に 1868 年の明治維新以降を指す。
20. 中村良夫『風景学 実践編』中公新書，2001 年